

# あのとときの常呂・写真館

VOL 57

(1972年)

昭和47年11月26日

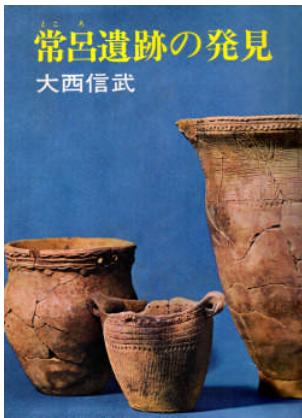
## 大西信武氏『常呂遺跡の発見』出版記念パーティ

▶大西信武さんの存在なくして常呂遺跡の発見はない、また大西さんと東京大学教授の服部四郎氏との出会いがなければ、常呂遺跡が今のように大きく注目されることもなかった、さらに言うならば、大西さんと服部氏をつなぐ樺太アイヌ文化の伝承者／藤山ハルさんがいなかったら常呂遺跡は今とは違う位置づけになっていたかもしれない…そう思わせる本になっています。

▶この本には、大西さんの生い立ちから始まり、工事現場で働いている中で竪穴群を発見したこと、藤山ハルさんをはじめアイヌの人々への共感などが綴られています、圧巻は服部四郎氏との劇的な出会いから東京大学による大規模・継続的な発掘・研究につながっていくところだと思います。



\* 出版記念パーティで紹介を受ける大西さん夫妻（右舞台下）：中央公民館



『常呂遺跡の発見』  
講談社

そのことを服部四郎氏が「私と大西さんとの出会い」という一文をこの本に寄せているので、抜粋して紹介します。「…私は…カラフト西海岸北部から引き揚げたアイヌの老媪（藤山ハルさんのこと）を発見し、ずっとその言葉を調べてきた。知っている単語をできるだけたくさん、しかもその意味用法をできるだけ詳しく正確に記述して、辞書をつくろうというのだ…昭和30年の夏、例の老媪についてアイヌ語を調べているとき、常呂館という旅館に泊まっていた。一日の調査を終え、夕食後、宿でくつろいでいると、私の部屋へ50歳あまりの見知らぬ男が何の案内もなく入ってきて、いきなりあぐらをかいた。見ると、ネクタイはなし、ズボンのボタンは全部はずれている。小柄でやせ形だが、顔は日焼けして額のしわが深く、眼光が鋭く、人差し指が1本ない…正直に言って〈何をゆすりにきたのだろう〉というのが私の最初の反応だった。しかし、30分ほど話を聞いているうちに、私はそのなかに真実を感じ取った…この人こそ、実は常呂の大竪穴群の発見者大西信武氏だったのだ」。この出会いの翌31年、服部四郎氏は大西さんの案内で〈日本に類例を聞かない竪穴群〉を見せられ、帰京後、東大の駒井教授に報告し、同年秋、駒井教授が



来町、32年から東大の発掘が始まり、今につながる大きなドラマに発展します。

▶この本には、栄浦の東京大学常呂研究室で長く研究生生活をされた藤本強氏の「常呂遺跡を調査して」という常呂で発掘した遺跡の基本的な知識を学ぶことができるテキストも載せています。



▶司馬遼太郎／著『街道をゆく38 オホーツク街道』にも大西信武さん、服部四郎氏、藤山ハルをつなぐぐ出会いの物語が紹介されています。

\*左2枚：出版記念パーティのようすとカラフトアイヌの唄と踊り。中央で座ってトンコリを演奏しているのは藤山ハルさん。